

# 原始時代にかえる男

J・ロンドン 作

辻井榮滋訳 & 付記

## I

男は、ひじょうにおとなしく冷静なタイプだった。しばし外壁の上にすわって、闇に潜んでいるかも知れないさまじまな危険の前触れになるものがありはせぬかと、湿った暗闇をうかがった。だが、じっと耳を澄ましてみても、何も聞こえはせず、風のうなり声が目に見えない木々のあいだを通りぬけ、木の葉が揺れ動く枝にあたってサラサラと鳴るばかりだった。濃い霧が、風に吹き流されて飛んだ。男にはこの霧は見えなかったが、その湿り気が顔に吹きつけられたし、すわっている外壁も湿っていた。

物音一つ立てずに外側からこの外壁の一番上まで登ると、今度も物音一つ立てずに内側の地面へと飛びおりた。ポケットから懐中電灯を抜きとるが、使わない。道は暗くとも、明かりは欲しくなかったのだ。懐中電灯を手に持ち、ボタンに指を押しあて、暗闇のなかを前に進んだ。地面は、足ざわりが柔らかで弾力性がある。枯れた松葉や木の葉や腐食土におおわれ、どうやらもう何年も乱されていないようだ。木の葉や枝がさつと体に触れるが、まっ暗なので、よけようがない。そのうち片手を前に伸ばしてさぐり状態で歩くが、一度ならず手が巨木の頑丈な幹にぶつかつた。どうやらぐるりがこうした木ばかりなのだ。いたる所に、それらのほんやりとした輪郭が感じとれる。それに、自分のほうへもたれかかってきて押しつぶそうとする巨大なものなかにあって、わが身がものすごく小さいという妙な感じを体験する。この向こうに目あての家があるのだから、そこま

でわけなく通じている小道なり曲がりくねった細道なりがあるだろう。

一度、男は抜きさしならぬ羽目に陥った。どつちを向いても、木々や枝に探りあたるか、下生えの茂みにつつかるばかりで、とうとうまるで出口がないようなのだ。それで、用心深く電灯をつけ、足もとの地面に光線を向けてみる。ゆっくりと注意深くまわりに動かすと、白くて明るい光に、前方の障害物が何もかもくつきりと細部にわたって照らされた。巨大な幹をした木々のあいだに、すき間が見え、明かりを消してそのあいだを通りぬけ、これまでのところでは、霧のしずくにも頭上のうっそうとした葉の茂みに守られて、足を濡らさずに歩みつづけた。男の方向感覚は間違つてはおらず、目あての家の向かっているとわかつていた。

それから、事が起こった——まったく思いもかけないことであつた。男の踏みおろす足が、何か柔らかくて生きたものを踏みつけ、そいつがその重圧を受けて荒い鼻息とともに頭をもたげたのだ。男はばつと飛びのいたかと思うと、うずくまり、その得体の知れないものの猛攻撃に備えて、どこへでもかまわずまた飛びのこうと、気を張りつめて待ちもうけた。しばらく待ちながら、自分の足もとから頭をもたげ、今や音も立てなければ身動きもせず、自分そっくりにうずくまり、気を張りつめて待ちもうけているにちがいないやつなんて、いったいどんな動物なんだろう、と首をかしながら、もう緊張しきれなくなつた。懐中電灯を前方にかざしながら、男はボタンを押し、見ると、びっくり仰天して絶叫した。おびえた子牛であるかと子鹿であろうと、はたまた好戦的なライオンであろうと、どんなものにも覚悟ができていた。が、目にしたものには覚悟が定まらなかつた。その瞬間に小さな懐中電灯がくつきりと白く照らしたものときたら、千年経つても男には忘れることのできないものであつた——それは、大きな色白の、黄色い髪とあごひげの男で、柔らかくなめした鹿皮モカシの靴をはき、腰のあたりにやぎの皮らしいものをつけているほかは裸である。腕と脚はむき出しで、同じく両肩も胸の大半もそうなのだ。皮膚は、なめらかで毛も生えていないが、日光や風にさらされて褐色をしており、皮下では、ごつごつとした筋肉が太った蛇みたくに節くれだつていた。

たしかに思いがけないことではあつたが、それでもなお、今述べたことだけで、男が絶叫したのではなかつた。恐怖の種となつたものは、その顔の言語に絶する残忍なところ、懐中電灯にもほとんどくらみもしない青い目の野獣のにらみ、あごひげと髪にこびりついて離れない松葉、それに、うずくまつて今にも飛びかかつてこようとしている恐るべき体全体といつたものであつた。ほとんど一瞬のうちに、こうしたものをみな目にしたものだから、絶叫がおさまらず、その生き物が跳ねると、男は懐中電灯の明かりをまともにあてて、地面にすばやく身を伏せた。足と向こうずねが肋骨にぶつかるのを感じ、飛びのいたかと思うと、その生き物自体は前方へ身を投げだし、ドスンとものすごい音を立てながら、下生えの中へと落下した。

落下の音がやむと、男は足を止め、四つんばいになって待ちうけた。生き物が動きまわつて、自分を捜しているのが耳でわかるが、もっと先まで逃げようとして自分のありかを知らせるのがこわいのだ。下生えに触れてバサバサという音を立て、あとを追いかけるに決まつている、

とわかつているからだ。一度、連発ピストルを抜くが、また気が変わる。落ち着きを取りもどしており、物音を立てずに逃げたいのだ。何度か、その生き物が茂みを盛んに叩いて自分を捜しているのが聞こえたかと思うと、またじっとしたまま耳を澄ましている時もある。そこで男は、ある思いつきをふと思ひ浮かべた。片方の手が、一本のずんぐりとした枯れ木の端くれの上に載っている。注意深く、まず暗闇のなかでまわりを手さぐりしてみて、腕を十分振りまわしてもまるで支障のないことがわかると、男はその木を持ちあげて、投げた。大きな木ではなかったから、遠くまで飛び、茂みの中へ音を立てて落ちた。生き物が茂みに飛びこむのが聞こえると、同時に、自分もどんなふうのように逃げていった。四つんばいになって、ゆつくりと用心しながら、はい続けていくと、しまいには両ひざが水浸しの腐食土の上に来て濡れている。耳を澄ますと、聞こえるのは風のうなりと枝から霧がポタポタと落ちる音だけである。用心を怠ることなく、直立すると、石の外壁まで進んでいき、その上に登ると、外の道路へと飛びおりた。

藪の中を手さぐりしながら、男は自転車を取りだすと、乗りにかかった。片足でペダルを回し、反対側のペダルを所定の位置につけようとした。そのとき、重い体がドサツという音とともに、軽快に飛びおり、しかもどうやら立っているらしい様子が耳に入る。もう待つてはおれず、自転車のハンドルに手を置いて駆けだすうちに、ようやくサドルに飛び乗ってまたがり、ペダルを踏み、スパートをかける。背後でバタバタとすばやく足が路面を打つ音が聞こえるが、それも遠ざかって、聞こえなくなった。

運悪く、町の方角から遠ざかりだし、丘陵地のほうへ向かって登っていった。男は、この道にだけは十字路がないことを知っていた。同じ道をもどって行くとなれば、あの恐怖を通りすぎるしかなく、心を鬼にしてそちらのほうへ向かっていくことなどできない。半時間もすると、いよいよ勾配が急になってきたものだから、自転車をおりた。さらに安全を求めて、自転車を道端に置いておくと、柵越えに登って、丘の斜面の牧草地に相違ないと思つたところへ入り、地面に新聞紙を広げて、腰をおろした。

「あーあー」と男は、声に出して言いながら、顔の汗と霧をぬぐった。

それから「あーあー」ともう一度言つて、巻きタバコを巻きながら、帰る算段をあれこれと考えてみるのだった。

それでも、まるでどうしようとはしなかった。暗闇ではあの道路と向かいあうまいとかたく決めており、膝に頭を垂れながら、居眠りをして、夜明けを待った。

それからどれぐらいの時間が経ったかはわからなかったが、男は若いコヨーテの騒々しい吠え声に目を覚ました。あたりを見まわし、そいつが自分の背後の丘の頂上にいるのを突きとめると、夜の様子が変わっているのに気づいた。霧が消えてしまつて、星と月が出、風さえもおさまっている。心地よいカリフォルニアの夏の夜に一変している。もう一度居眠りをしようとするが、コヨーテの吠え声に邪魔される。半ば眠った状態で、荒々し

く気味の悪い歌を聞いた。あたりを見まわしてみると、あのコヨーテは吠え立てるのをやめて、丘の頂上づたいに逃げ、そのあとから全速力で、もはや歌わずに、庭で出会ったあの裸の生き物が追いかけていてではないか。その追跡が見えなくなる頃には、若いコヨーテが追いつかれそうだ。男は悪寒がしたように震えながら、立ちあがり、柵を乗り越えて、自転車に乗った。そんなことより今が好機であり、自分でもそう心得ていた。恐怖の種は、もはや自分とミル・ヴァレーのあいだにはなかった。

猛烈なスピードで丘を下っていったが、丘の下の曲がり角の、まっ暗がり、路上の穴にぶつかり、自転車のハンドルを飛び越えてまっさかさまに落下した。

「今夜ときたら、ろくなことがありやしねえ」と男は、ブツブツ言いながら、自転車のこわれた前輪支柱を調べた。

役に立たなくなつた自転車をかつぐと、てくてくと歩きつづけた。やがて石の外壁のところまでやって来ると、自分の体験を半信半疑ながら、道路に足跡を捜して、見つけた——それらは、鹿皮モカンの靴の跡で、大きなものであり、つま先が土に深く食いこんでいる。それらの足跡のほうへ身をかがめて調べているときに、またあの気味の悪い歌を聞いた。あの生き物がコヨーテのあとを追うのを見たのだから、まっすぐに走つたのでは勝ち目がないことはわかっている。そんなことはやってみようともせずに、道路の向こう側の暗がりカクに隠れているしかないと考えた。

それから再び、裸の男らしきものが速く軽快に走り、走りながら歌っているのを見た。こちらとは反対側でそいつが立ち止まったものだから、男の心臓は静止したほどだった。それでもこちらの隠れている所のほうへは来ないで、空中に飛びはねたかと思うと、道端の木の枝につかまって、大枝から大枝へと猿みたいに、すばやく登っていった。そいつは外壁を飛び越して、壁の上のほう十二フィートあたりから別の木の枝木の中へと入り、地面において見えなくなった。男は、しばらく驚きながら様子をうかがっていたが、そのうちまた歩きだすのだった。

## II

デイヴ・スロッターは、けんか腰になつて机に寄りかかった。ジェイムズ・ウォードという、ウォード・ノウルズ商会の社長の社長室に通じる入り口をふさいでいる机である。デイヴは、腹を立てていた。社長室の外の事務室にいる誰もが、デイヴをうさん臭そうに見やっしたし、彼の前に立つた男はえらくうさん臭そうだった。

「ウォード氏に、大事な用件なんだつて言つてくれ」と、デイヴはせつづく。

「社長は、今要件を書きとらせている最中で、邪魔してほしくないんですよ」との返答。「明日いらしてください」

「明日じゃ遅すぎるんだ。早く行って、ウォード氏にすごく重大な問題だと言ってくれ」

秘書は迷ったが、デイヴはそこにつけ込んだ。

「俺は夕べ、湾を越えてミル・ヴァレーへ行つて、それで大事な用件があるんだ、って言うてくれりゃいいんだ」

「何ていうお名前でした？」と、秘書が訊きただした。

「名前なんかどうだっていい。社長は俺のことを知らんよ」

デイヴは、社長室に通されたときも、まだけんか腰の気持ちでいた。が、大きくて金髪で色白の男が、速記者に向かって口述していたのを、回転椅子をぐるりと回してデイヴのほうに向きあうと、デイヴの態度はころっと変わった。どうして変わったかはわからなかったが、彼はひそかに自分に腹を立てていた。

「あんたがウォードさんかい？」とデイヴは、たわいもなく訊いてみたが、そのたわいのなさにさらにじれったくなつた。そんなことを言うつもりなど、まるでなかったのだ。

「そうです」と、相手は答えた。「それで、あなたは？」

「ハリー・バンククロフト」と言つて、デイヴは嘘をついた。「あんたは俺のことは知らないし、俺の名前なんかどうだっていいんだ」

「取り次ぎの話によると、あなたは夕べミル・ヴァレーにいらしたとか？」

「あんたはそこに住んでるんだろ？」とデイヴは、逆に訊きかえしながら、うさん臭そうに速記者を見た。

「ええ。それでご用件はどんなことでしょうか？ とても忙しいものですから」

「あんたと二人きりで話したいんですがね」

ウォード氏は、すかさず鋭い眼光を送ると、躊躇して、それから決断をした。

「しばらくこのままでいいですから、ポターさん」

速記者の女性は、立ちあがると、メモを寄せ集めて、出ていった。デイヴはジェイムズ・ウォード氏を不思議そうに見ていたが、ついにこの紳士のほうが、次々と思ひ浮かびかける考えをもらした。

「それで？」

「俺は夕べ、ミル・ヴァレーまで出かけていつてね」とデイヴは、途方にくれて喋りだした。

「そのことは先に聞きました。どういふご用件で？」

それでデイヴは、信じがたい確信がつのつてくることなど物ともせず、続けて言った。

「あなたの家に、いや、つまり庭にいたんだ」

「そこで何をしていたのですか？」

「押し入ろうとしたわけさ」とデイヴは、まったくお構いなしに答えた。「あなたが中国人の料理人と二人きりで住んでいるって聞いたもんで、もつてこいだと思えたのさ。ただ、押し入りはしなかったがね。あることが起こつて、できなかった。それでここへ来たつてわけだ。警告をするためさ。一人の野蛮人が、あなたの庭に放たれているのを見つけたんだ——真正銘の悪魔さ。そいつは、俺みたいなもんをずたずたに引きちぎつてしまえる野郎だ。そいつに追われて、俺は必死に逃げたぜ。取り立てて言うほどの服も着てなけりや、木の登り方も猿みたい、走り方ときたら鹿みいだ。そいつがコヨーテのあとを追いかけているのを見たが、最後に見かけたときなんか、いやほんとに、コヨーテに追いつくところだったぜ」

デイヴはちよつと間をおき、自分の述べる言葉にどんな効きめが現われるかを待ちうけた。だが、何の効きめも現われなかった。ジェイムズ・ウオードは、何も言わずにいわくありげ、ただそれだけであった。

「それは実に大変なこと、驚くべきことです」と、彼はつぶやいた。「野蛮人、ですつて。なぜそんなことを私に言いいらつしやつたのですか？」

「あなたに身の危険を知らせるためさ。俺は多少手ごわい相手だが、人殺しをいいこととは思つちやいない……つまり、不必要な人殺しは、な。俺は、あなたが危険にさらされるつてわかつたのよ。それで知らせてやろうと思つたわけだ。正直な話、それだけのことさ。もちろん、俺の迷惑に何かやろうつて言うんなら、いただくよ。そんなことも、頭にあつた。だけど、あなたがくれようとかくれよまいがかまやしない。とにかく知らせたんだし、義務は果たしたぜ」

ウオード氏はつらつら考え、机の上をドンドン叩いた。デイヴは、相手の手が大きく、力が強く、しかも、黒く日に焼けている割によく手入れされているのに気づいた。さらに、すでに前に目をひいたものにも気づいた——それは、片方の目の上の額に張られた、小さな一枚の肌色の絆創膏ばんそうこうであつた。それでもなお、無理やり頭の中に入りこんできた考えは、信じがたいものだった。

ウオード氏は、上着の内ポケットから札入れを出すと、紙幣を一枚抜きとつて、デイヴに渡した。デイヴは、それをポケットに入れるとき、二十ドル紙幣であることを目に留めた。

「どうも」とウオード氏は言つて、訪問会インタビュー見が終つたことを暗に示した。「この件は調査させることにしましょう。野蛮人が自由に走りまわるなんて、たしかに危険ですからね」

それにしてもウォード氏が実に物静かな男なので、デイヴの勇気が息を吹きかえした。それに、また別の考えも思い浮かんでいた。あの野蛮人は、どうやらウォード氏とは兄弟で、ひそかに監禁されている精神異常者なのだ。デイヴは、そんなことを耳にしたことがある。ひよつとしたらウォード氏は、そのことを内密にしておきたいのだろう。だから、俺にこの二十ドルを渡したのだ。

「ねえ」と、デイヴは切りだした。「そのことと言や、あの野蛮人はあんたによく似てた——」

デイヴには、ここまで言うのがやつとだった。その瞬間、相手が変身するのを目撃し、思わず前夜と同じ言いようもないほど残忍な青い目に見入っており、同時に、驚ろかみする爪のような手と、自分に飛びかからんとする同じ恐るべき巨体にも見入っていた。ところがこの時のデイヴには、投げつける警棒もなく、両腕の二頭筋をものすごい力で握られて、苦痛のあまりうめき声をあげるしかなかった。大きな白い歯がさらけ出されるのが見えたが、どう見ても噛みつかんとする犬の歯のようだった。歯がデイヴの喉もとをつかみにかかったとき、ウォード氏のおごひげがデイヴの顔にさつと触れた。しかし、噛みつかれることはなかった。その代わりにデイヴは、相手の体が鉄のような自制心できるように、こわばるのを感じた。それから難なく大変な力で投げ捨てられたものだから、壁にしかその勢いが止められず、デイヴはあえぎながら床に落ちた。

「ここへやって来て私をゆするうとは、どういう了見だ？」と、ウォード氏はどなりつけていた。「おい、その金を返せ」

デイヴは、ひとことも言わずに紙幣を返した。

「君が善意で来てくれたんだと思つたが。もうわかつた。君のことはもう見たくも聞きたくもない。でないと、君にふさわしい投獄してことにしてやるぞ。わかつたか？」

「はい」とデイヴは、あえぎながら言つた。

「なら、出ていくんだ」

それでデイヴは、もうそれ以上何も言わずに出ていった。二頭筋が両方とも、あんなふうにはひどいつかまれ方をしたために、痛くてたまらなかつた。手をドアの取っ手に置いたとき、デイヴは呼びとめられた。

「君は運がよかつたな」と、ウォード氏が言っているのを聞いてデイヴは、その顔と目が残酷にほくそえみ得意気なのに気づいた。「君は運がよかつた。こちらにその気があれば、君の筋肉を両腕から引き裂いて、そのくずかごに投げこむことだつてできたのだからな」

「はい」と、デイヴは言つたが、声の響きからそのようになかたく信じているようであった。

デイヴは、ドアを開けて出ていった。秘書は、不審そうに見やつた。

「くそっ！」デイヴが何とか口にできたのはこれだけで、こう言つて会社から出ていき、この物語からも姿を消した。

## III

ジェイムズ・G・ウォードは四十歳で、はぶりのよい実業家だったが、ひどく不幸であった。四十年間というもの、あの問題を解決しようとしてきたが、だめだった。それは実のところ自分をめぐる問題であり、年々ひどい悩みの度合いが増すようになった。その内には二人の人間が存在しており、年代順に言えば、この二人には数千年ほどの隔りがあった。この二重人格という問題を研究してみたが、その調べようときたら、この難解で不思議な心理学の分析にあつて指折りの専門家六名の誰よりも深かった。それまで記録に残っているいかなるものとも違う事例なのである。小説作家のどんなに奇抜な空想のほとばしりをもつてしても、彼のような人物を十分には思いつかなかつた。ジキル博士とハイド氏（英国の作家R・L・ステイヴンスンの小説。一八八六年の出版で、二重人格を描いた代表的作品）といった人物でもなければ、キプリング（一八六五—一九三六 英国の短篇作家・詩人）の「世界で最も偉大な物語」に登場する不幸な若者にも似ていない。二つの人格はすっかり混ぜあわさっているので、両者はいつもほとんど自覚しており、互いに意識しあっているというわけだ。

一方の自己は、育ちや教育が当世風であり、十九世紀後半を生きぬき、二十世紀も最初の十年間をたっぷり生きてきた人間の自己であった。もう一方の自己はいえ、数千年前の原始的な状況のもとに暮らす野蛮人とか未開人と位置づけた。だが、どっちの自己が自分で、もう一方はどっちなのか、どうしてもわからない。両方とも自分であり、いつもそうなのだ。一方の自己がもう一方の自己のやることがわからないなどということは、まずない。さらには、その昔の自己が生きていた過去を、見たこともなければ記憶もないということだ。その大昔の自己は現在に生きてはいるが、その一方で、その遠い過去にあつたに違いない生き方をやむにやまれずしているのである。

子供の頃の彼は、父母やかかりつけの医者泣かせであつた。かと言って、そのとつびな行動を解く手がかりを思いつくなんて、彼らにはとてもできやしなかつた。そういうわけで、彼が午前中は眠くてたまらず、夜ははなはだしく行動的なを理解できなかつた。彼が夜に廊下をさまよい歩いたり、目がくらむぐらい高い屋根をよじ登ったり、丘を駆けたりしているのを見つけると、夢遊病者だと思ひこんだ。実際は、眠つてなどおらず目を大きく見開き、大昔の自己がやむにやまれず夜にうろつきまわっているにすぎなかつたのだ。あの鈍感な医者に訊かれて、ほんとうのことを述べることがあるが、その意外な新事実も「夢うつつ」と一笑に付されて退けられるという不面目を味わつた。

要するに、たそがれ時や晩が近づいてくると、眠れないのだ。部屋の四方の壁には、うんざりし抑圧される。無数の声が暗闇越しにささやきかけてくるのが聞こえる。夜が呼びかけてきたが、それは、一日二十四時間のうちのそのあいだ、つまり夜のあいだは、とりわけ夜の徘徊者だつたから



だ。ところが、そんなことは誰にもわからなかったし、彼も二度と説明しようとはしなかった。周囲の者は夢遊病者扱いにし、それに応じた予防策を講じた——が、そんな予防策もあまりに無駄なことが多かった。成長するに伴って、いつそうずる賢くなつていったのだ。それで夜の大半は、もう一方の自己にもどつて野外で過ごした。その結果、午前は眠ることになる。午前の勉強や学校はともおぼつかず、午後だけに、それも家庭教師のもとでなら何でも教われるということがわかった。このようにして、今の自己が教育され育まれたのだった。

それでも、子供としては問題児であることに変わりがなかった。非情な残酷さと意地の悪さを備えた、小さな悪魔として知られていた。かかりつけの医者は、彼を精神的奇形動物であり変質者だと見なした。数少ない男友だちらは、彼のことを神童と呼んだ。とは言つても、すっかり恐れをなしてはいたのだが。木登りにしても、泳ぎにしても、駆けっこにしても、悪さにしても、誰も彼にかなう者はいなかった。同時に、彼と戦う勇気のある者もいなかった。恐ろしく強く、猛烈なこときわまりなかったのだ。

九歳にして、丘陵地へと家出し、そこで、夜にうろつきまわってはわが世の春を謳歌した。その間七週間、やがて見つけだされ、家へと連れもどされた。不思議だったのは、その間どうやって過ごし、元気なままでいられたのかということだ。みんなは知らなかったし、本人も決して口にはしなかった。殺したうさぎのこと、捕らえてむさぼり食った鶉うらちのひなや親のこと、攻め入った農家の鶏舎のこと、さらには、ほら穴に巣をこしらえ、乾いた木の葉や草を敷きつめて、その中で何日間も午前中は暖かく気持ちよく眠ったことなどを。

大学へ行けば、午前の講義中は寝ぼけているのに、午後になると優れた才気を発揮することで評判だった。余分の読書と仲間の学生のノートを借りることで、大きらいな午前の科目にはどうにかすれすれで合格できたが、午後の科目はめざましい成績をおさめた。フットボールでは巨人で恐怖の的であることを証明し、ほとんどすべてのトラック競技種目においても、時々見せるパーサーカー(北欧伝説に登場し、戦場で狂暴になつて無敵の強さを誇った猛戦士)のように変に荒れ狂うということがなければ、勝ち頼みとされただろう。そのくせ仲間、彼を相手に拳闘をするのをこわがったし、その最後のレスリングの試合で彼が有名になったのは、対戦相手の肩に噛みついたからであった。

大学を出ると、彼の父親は、見込みなしとあきらめ、ワイオミング州のある農園へやって、カウボーイたちと一緒に暮らさせた。三ヵ月後には、勇猛なカウボーイたちも、とても自分たちの手には負えないと白状し、父親に打電して、この野蛮人を連れもどしに来るようにと伝えた。さらに、父親が連れもどしにやってくる、カウボーイたちが認めたのは、髪をまん中で分けたこの大学卒業生なんかよりも、遠ばえする人食い動物や訳のわからないことを口走る狂人、跳ねまわるゴリラ、灰色の大熊グリズリスベア、さらには人食い虎と仲良しになるほうがはるかにいいということだった。

大昔の自己の生活についての記憶の欠落には、例外が一つあったが、それは言語だった。隔世遺伝の何かのいたずらによつてか、この大昔の自己の言語のある部分が、人種の記憶として彼に伝わってきているのだ。楽しいとき、意気軒昂のとき、戦いのときに、突然荒々しい野蛮な歌や聖歌を

歌いだしてしまおうというわけだ。こんなふうにして、もう死んで塵ちりとなって数千年経っているはずのあの自分の迷える半分がいつこのものであったかを突きとめたのだ。一度、わざわざ、古代の歌をいくつかワーツ教授の面前で歌ったことがあった。教授は、古代サクソン語の講義をする、評判の情熱的な言語学者だった。最初の歌に、教授は聞き耳を立て、雑種の言語すなわちにせドイツ語の何たるかを訊きただそうとした。二つめの歌が歌われると、教授は強い興奮を覚えた。ジェイムズ・ウォードはそれから、激しい組打ちや戦いをやっている時にいつもいやおうなしに口をついて出てくる歌を歌って、その芸当を締めくくった。そのときにワーツ教授は、その歌がにせドイツ語ではなく、初期のドイツ語ないしは初期のチュートン語であり、その年代は学者たちによって発見され後世に伝えられてきたものにはるかに先行するに違いない、と声明した。すこぶる初期のものだから、自分の能力及ぶところではない。かと言って、自分の知っている語形や、鍛えた直感力によればまったく正真正銘の語形とをたえず思いださせるものに満ちているという。教授は、歌の出どころを問いただし、それらの載っている稀少せうせう本を貸してほしいと頼んだ。さらには、なぜ若いウォードがいつもドイツ語のことはまるで知らない態度をとったかを訊きただそうとした。が、ウォードには、知らないことの説明はおろか、本を貸すこともできなかった。その後、何週間にもわたってせがんだり哀願したりしたあと、ワーツ教授はこの若者を嫌い、嘘つきと信じ、どんな言語学者も思いもかけなかった最古以上に古いこのすばらしい一節を瞥見させてくれないなんて、恐ろしく自分勝手な男であると分類した。

だが、このひどく入り混じった若者が、自分の半分が最近のアメリカ人で、あとの半分が初期のチュートン人であると知っても、ほとんど役には立たなかった。にもかかわらず、内在する近代的なアメリカ人のほうは弱虫どころではなく、（この両者とはかけ離れた自分であつても）夜はさまよい歩いて朝ともなるともう一方の自己を眠らせる未開人と、教養があつて洗練された他の人々同様に正常で生き愛し仕事に従事したいと願うもう一方の自己とのあいだの調整や折りあいを強要するだろう。午後と宵の口は一方に充て、夜は他方に充てた。午前と夜の一部分は、両者相まって眠りに充てられた。それでも午前中は、文明人のようにベッドで眠った。夜は、デイヴ・スロッターが森の中で踏みつけたあの夜の時のように、野獣のごとく眠った。

父親に資本金を融通してくれるよう説きつけて、ウォードは実業界に入り、その仕事をもののみごとく成功させたが、午後は仕事に専心し、相棒の共同経営者のほうが午前中に仕事をあてた。宵の口はつきあいで過ぎしたが、時刻が九時か十時にもなつてくると、抑えきれない落ち着きのなさに負けて、翌日の午後まで人のよく出入りする所から姿を消した。友人や知人たちは、彼が時間の多くを運動スポーツに費やしているものと思つていた。運動には違ひなかつただけけれど、運動の種類など夢にも思わなかつただろう。仮に彼が、夜ミル・ヴァレーの丘陵地帯を越えてコヨーテを追って駆けているのを見かけたとしても、また、寒い冬の朝などに、一人の男がラクーン海峡（サンフランシスコ湾とサン・バークロウ湾のあいだの水路）の激浪やゴート島（サンフランシスコとオークランドを結ぶベイ・ブリッジを中継しているヤーバ・ブウエイナ島の俗称）とエンゼル島（サンフランシスコ湾上に浮かぶ、

ティブロン先の先にある島)のあいだの急流を岸から何マイルも離れて泳いでいるのを見かけたと伝えたときにも、スクーター船(通例二本マストの縦帆式帆船)の船長たちは信じなかつた。

ミル・ヴァレーのバンガローで、ウォードは一人暮らした。ただ、中国人の料理人兼雑役夫のリー・シングだけは別で、彼は主人の異様な言動について重々承知しており、他言無用ということで高い給料をもらっていて、決して他言することはなかつた。満足な夜を過ごし、朝の眠りとリー・シングの朝食を済ませたあと、ジェイムズ・ウォードは正午の渡し船<sup>フェリーボート</sup>で湾を渡つてサンフランシスコに赴き、クラブから会社へと出勤したが、それは都会で見かける普通のよくありがちな実業家の姿であつた。ところが、宵がふけるにしたがつて、夜が呼びかけてきた。知覚という知覚、それに落ち着きのなさが甦<sup>よみがえ</sup>つてきた。聴覚が急に鋭くなり、無数の夜の音が、気を引くような馴染みの話を持ちかけてくる。すると、一人でいる場合など、荒野から捕まえられてきて監に入れられた野獣みたいに、狭い部屋の中をのそりのそりで行つたり来たりしはじめるのだつた。

一度、勇気をふるつて恋に落ちたことがあつた。二度とそのようにわき道にされることはしなかつた。おつかなかつたのだ。それで何日間も、相手の若い婦人は、びっくりして、多少なりとも若い淑女の品位を失つてしまひ、腕と肩と手首にいくつもの青黒い打撲傷——彼がすっかり愛におぼれた優しさからだつたにせよ、夜もふけてから与えた愛撫のしるし——を負つた。手違いがあつたわけだ。もし午後<sup>午後</sup>に求愛を敢行していたなら、万事うまくいっていただろう。その時に求愛していとすれば、もの静かな紳士としてやっていたら——ところが夜ときたものだから、暗いドイツの森の野暮な、人の女房を盗むような野蠻人だつたというわけだ。考えたあげくに、午後の求愛ならうまくやれると判断した。が、同じく考えたあげくに、結婚はひどい失敗になるものと確信した。結婚して暗くなつてから妻と顔を会わせるなど、想像してみるのもひどかつた。

そこでウォードは、求愛はいつさい慎み、二重の生活を規則正しく行ない、仕事で百万ドルを儲<sup>たく</sup>けた。そして婿を探す母親たちや、目もとの涼しい熱心な目つききの年齢もさまざまな若い婦人たちを敬遠し、リリアン・ガースデイルと会つても晩の八時以後はぜつたいに会わないことをかたく守り、夜ともなるとコヨーテを追いかけて、森の巢穴で眠つた——しかもその間ずっと、リ・シングは別として、その秘密を守っていた……それに今では、デイヴ・スロッターも。このデイヴが自分の二人の分身に気づいたことに、ウォードはびっくりした。こちらにも反撃してこの夜盗の肝をつぶしてやつたにもかかわらず、やつは喋るかも知れない。仮にやつが喋らなかつたとしても、いずれそのうち誰かほかの者に見破られるだろう。

こうしてジェイムズ・ウォードは、もう一度思いきつた努力をして、自分の片割れであるチュートンの野蠻人を抑えにかかつた。リリアンと会うのは午後と晩の早いうち、ということにもののみごとにしてあつたので、彼女が彼の長所も欠点も含めて彼の求婚に応じる時がやつてきた。同時に彼は、二人の生活がひどくならないようにひそかに熱烈に祈るのだつた。この間というもの、彼が自分の中の野蠻人を抑える慣らしよつたら、試合に向けてきびしくまじめにトレーニン<sup>トレーニング</sup>グを積むどんなプロボクサーにも優<sup>まさ</sup>つていた。とりわけ、日中はたくたくに疲れてしまおうと懸命になつ

た。眠りが夜の呼び声に耳を貸さないようにするためだった。会社から休暇をとり、長い狩猟の旅に出かけて、とても寄りつけないような起伏の多い土地をあまねく鹿のあとを追った——それも、つねに日中に。夜になると、屋内にあってぐったりとしていた。家にあつては、二十種類もの運動器具を据えつけて、ある運動を他の男性なら十回やるところを、何百回も行った。さらに、森で寝る場合と家で寝る場合の折衷案として、二階に張り出し寝所スリーピングポーチを作った。ここだと、いちおうありがたい夜の空気が吸えた。二重の障壁によって、森の中へ逃れることができなかつたし、リー・シングが毎夜鍵をかけて閉じこめ、毎朝外へ出した。

八月になって、召使いの数を増やしてリー・シングを手伝わせ、思いきつてミル・ヴァレーのバンガローで宿泊客の接待をした。リリアンとその母親、リリアンの弟、それに双方の友人十二名が客であつた。二日二晩は、万事順調だった。それが三日めの夜になると、十一時までブリッジをやつていたので、ウォードにはもう大丈夫と鼻高になるだけの根拠があつた。落ち着きのなさはうまく隠せたものの、不幸なことに、リリアン・ガーステイルがウォードの右側にいるブリッジの敵であつた。彼女はか弱くデリケートな女性の華であり、ウォードの夜の気分では、彼女のか弱さが頭に来た。彼女を愛する気持ちが弱まつたというのではなく、手を伸ばして彼女を手荒くひどい目にあわせずにはいられない気持ちがほとんど抑えきれないほどだったのだ。とりわけそういう気持ちになつたのは、彼女が彼を負かすような持ち札を出そうとしている時であつた。

ウォードは、鹿猟犬を一匹中へ入れており、緊張して粉々に飛び散つてしまふにちがいないと思われたときなど、その犬に手を置いてなでやると、ほっとした。そんなふうにならぬか毛並みと触れあふことで、すぐに緊張がほぐれ、その晩は最後までランプをやられた。主人役の彼がひどく四苦八苦しているなど誰も思いも寄らなかつたのだが、その間彼のほうは、実に気楽に笑い、えらく熱心に慎重にブリッジをやつていたわけである。

みんながそれぞれに休む時間になつたとき、ウォードはみんなの面前でリリアンと別れた。ひとたび張り出し寝所につき、無事閉じこめられてしまつと、運動量を二倍、三倍、四倍にさへして、ようやくへとへとに疲れて、寝いすに横になると、眠ろうと努め、特に自分を悩ませる二つの問題について思案した。一つはこの運動の問題だが、これがまたつじつまが合わないのだ。こんなふうにならぬ運動をすればするほど、筋骨たくましくなる。なるほどこのように夜を駆けるチュートン人の自我をすっかり疲れさせらるるのも事実だが、どうにも自分の力にかなわなくなつて圧倒されてしまふ、これまでに知らないような恐ろしい力になる致命的な日を抑えているだけに思われるのだ。もう一つの問題というのは、結婚の問題で、暗くなつてから妻を避けるためにとらねばならない策略の問題である。このようにして甲斐もなく思案しながら、寝入つたのだつた。

ところで、その夜巨大な灰色熊が突然現われる前はどこにいたのかがしばらくの謎になつており、「スプリングズ兄弟サーカス団」の人々は、ソーサリートウ（ゴールドデン・ゲイト・ブリッジを渡つたところにある、サンフランシスコ対岸の町）にお目見えして、「捕獲された過去最大の灰色熊ビツ

グ・ベン」を長いあいだ捜したが、無駄であった。それどころかビッグ・ベンは、逃げだして、迷路のようなバンガローと田舎の地所のかなからジェイムズ・J・ウォードの庭を訪問先に選んだ。ウォード氏がまっ先に気づいたのは、身を震わせ緊張しながら思わず立ちあがった際に、その胸には戦いが押し寄せ、その口もとには関せきの聲がのぼったことであった。外からは、獵犬たちの激しく太い吠え声やらうなり声やらが聞こえてきた。そして、大混乱のなかをナイフで突き刺したように鋭く聞こえてきたのは、傷ついた犬の激しい苦痛であった——あれは自分の犬だと、彼はわかった。

パジャマを着たまま、スリッパをはこうともしないで、ウォードはリー・シングが実に入念に鍵をかけておいたドアを突き破って、急いで階段をおり、夜の外へと出ていった。素足が砂利を敷いた車の引きこみ道にぶつかると、突然立ち止まり、よく知っている入り口の階段の下の隠し場所に手を伸ばして、大きなごっこつしたこん棒——丘陵地帯へ狂気じみた夜の冒険をいく度となくやった際の旧友だ——を引っ張りだした。犬たちが半狂乱になって大騒ぎしながら近づいてきたものだから、ウォードはこん棒を振りまわしながら、まっすぐ茂みの中へ飛びこんで、それに立ち向かった。

目を覚まされた家の者たちは、広いヴェランダに集まってきた。誰かが電灯をつけたが、見えるのは互いのおびえた顔ばかり。赤々と照らされた車の引きこみ道の向こうには、木立がまっ暗闇の壁を成している。なのに、その暗闇のどこかで、恐ろしい格闘が行なわれている。動物たちの悪魔のような叫び声、大きなさまざまなうなり声、殴打が加えられる音、それに、動物たちの重い体が下生えに激突して立てるすさまじい音などが聞こえてきた。

戦いの動向は、木立の中から見物人たちのすぐ下の車の引きこみ道へとどつと移ってきた。そのとき、みんなは目にした。ガースデイル夫人は泣き叫び、目まいがして息子にしがみついた。リリアンは、ひどく体を震わせて手すりを強くつかんだものだから、その後何日も指先に打ち身のあとが残ったが、その彼女は、黄色い髪の険しい目をした巨人をぞつとしながら見つめた。何しろこの巨人が自分の夫となる男とわかったのだから。その彼が大きなこん棒を振りまわし、自分の見たこともない大きな毛むくじゃらの怪物相手に猛然と、しかも冷静に戦っているのである。その獣の爪にひと裂きされて、ウォードのパジャマの上着は引きはがされ、その身にも血の筋がついていた。

リリアン・ガースデイルの恐怖の大半は最愛の男に対するものだったが、同時にその恐怖の大部分は、あらゆる獐猛さを備えたその男自身に対するものであった。こんなに恐るべきすごい野蠻人が、自分の婚約者の糊のついたシャツと普段着の下に潜んでいるなど、夢にも思わなかった。しかも、男がどんなふうにな戦うかなど、まるでわからない。こんな戦いはたしかに近代的是ではないし、また、ここで目にしていても近代人ではない。もっとも、彼女はそれに気づいてはいなかったが。何しろ、これはジェイムズ・J・ウォード氏というサンフランシスコの実業家なのではなく、

名もない得体の知れない、がさつで粗暴な野蛮人なのであり、何か偶然の戯れによつて、三千年後に生まれなおしてきたのだから。

獵犬たちは、相変わらず気違いじみた騒ぎを続けており、戦いのまわりを回ったり、飛びこんだり飛びだしたりして、熊の気を散らした。熊が身を返して側面攻撃に立ち向かうと、男は飛びこんで、こん棒を打ちおろす。そうした殴打にことごとく怒つて、熊は突進してくる。すると男は、跳んだりはねたり、犬たちをよけながら、後ろへさがるなり、どちらか一方の側へと回る。すると犬たちは、そのすきにつけ込んで、もう一度飛びこみ、熊の怒りを誘うのだった。

突然終局がやってきた。ぐるぐる回りながら、灰色熊は一匹の獵犬を捕らえ、こいつに前足を大きく振りかぶつてすさまじい勢いで殴りつけた。犬の肋骨は陥没し、背骨はへし折られ、二十フィートも投げとばされた。すると、野獣のような男はかつとなつた。開いた口から荒々しい不明瞭な叫び声を発して怒りのあわを吹きながら、飛びこんでいき、両手で力いっぱいこん棒を振りまわしたかと思うと、体を起こしかけている灰色熊の頭にまともに打ちおろした。そのような猛烈な一発の力には、灰色熊の脳天でも持ちこたえられず、倒れて獵犬たちに噛み散らされてしまった。そして犬たちがちよこちよこ走りをしているなかを、男は死体の上にとつかと飛びのり、白い電灯に照らされて、こん棒に寄りかかりながら、不明の言葉で勝利の歌を歌つた——あまりにも古い歌なので、ワーツ教授ならその歌の解明に十年でもかけただろう。

来客たちは、駆け寄つていつて捕まえ歓呼しようとした。が、ジェイムズ・ウォードは突然昔のチュートン人の目で見ながら、自分の愛する色白で金髪のか弱い二十世紀の女性を見て、頭の中で何かがポキンと折れる気がした。弱々しく彼女のほうへとよろめき、こん棒を落として、倒れそつた。どこか思わしくないことが起こつたのだ。頭の中では、耐えられない苦悩にもだえていた。まるで自分の魂が飛び散っているみたいだつた。ほかの者たちの燃えるまなざしを追つて、ちらつとふり返ると、熊の死体が見えた。それを見ると、彼は恐ろしくてたまらなかつた。もしみんなが制止してバンガローの中へ連れて入つてくれなかつたら、ひと叫びして逃げ去つていただろう。

\* \* \* \* \*

ジェイムズ・ウォードは、今まで通りウォード・ノウルズ商会の社長である。だが、もう田舎には暮らしていないし、夜ごと月明かりのもとコロテのあとを追いかけてもいない。彼の内側にいた大昔のチュートン人は、ミル・ヴァレーで熊と戦つたあの夜に消えてなくなつたのである。ジェイムズ・J・ウォードは今やそつくりジェイムズ・J・ウォードであり、その本性もどの部分も、太古の世界からさすらつてきた時代錯誤（野蛮人のこと）を分けあつてはいない。そしてジェイムズ・J・ウォードは完璧なまでに現代人であるから、チュートン人だつた時にはなかつた文明化した恐怖ののろいというものをいやというほど十分に知っている。今では暗闇がこわく、森の夜など底知れず恐ろしいものとなつていとうわけだ。街のほうの家はま新しく、彼は夜盗よけの装置に多大の関心を示している。家には電線がいっぱい張りめぐらされており、就寝時間後は来客が呼吸

をしても警報を出しかねない。加えて、旅人がチョッキのポケットに持ち歩いて、どんな状況でも即座にうまく利用できる、鍵のないダイヤル錠（数字と文字の組合せの）を発明した。けれども彼の妻は、夫のことを臆病者とは思っていない。そんな馬鹿ではない。それに、どんな英雄もそうだが、彼もすでに得ている名誉に甘んじている。その勇氣について、ミル・ヴァレーの顕著な出来事を知っているあの友人たちが問いたただすことも決してなかった。

### 「原始時代にかえる男」訳者ノート

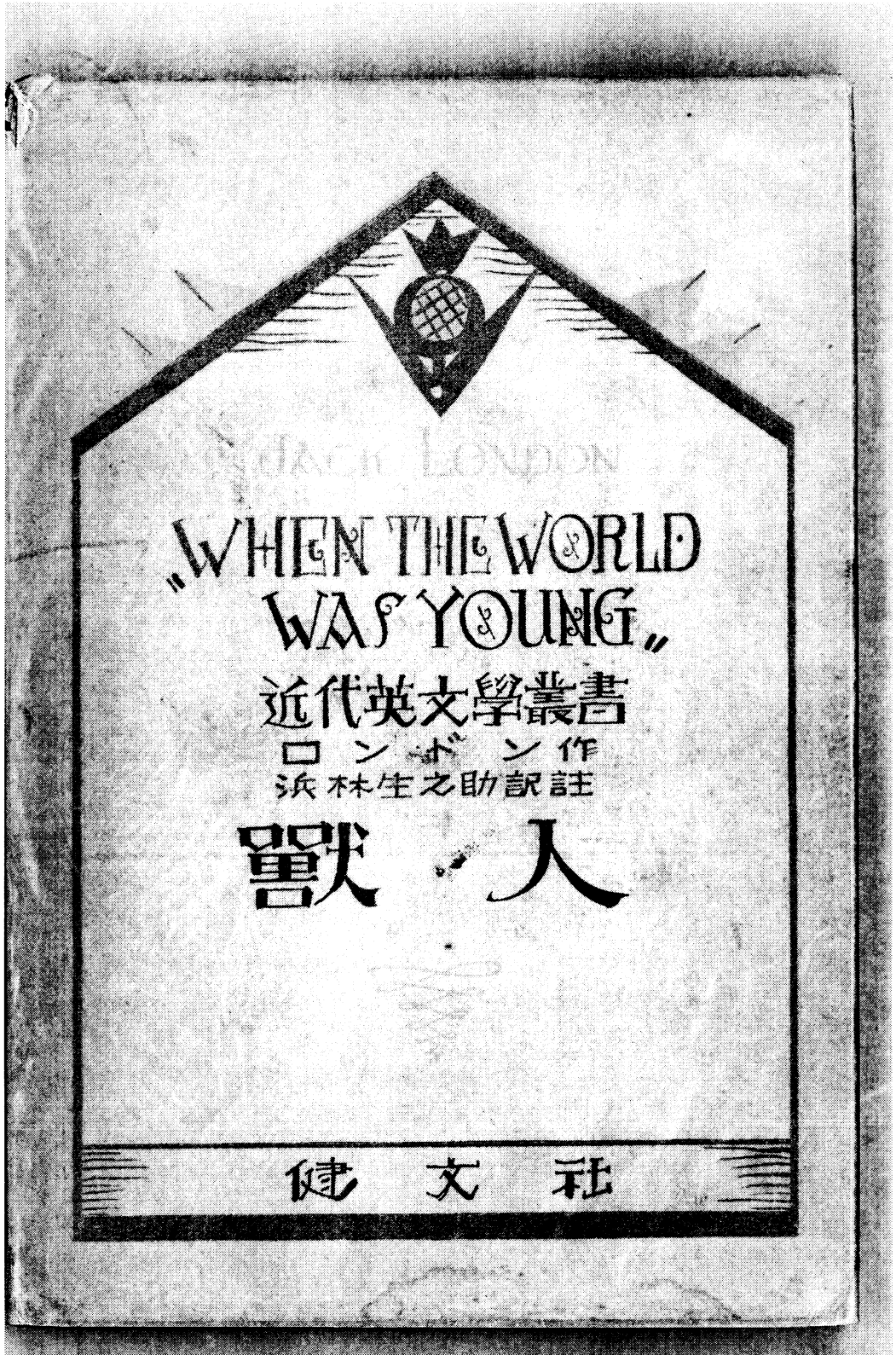
何もジャック・ロンドンに限ったことではないが、小説の類いの題名には変わったところか凝ったものが少なくない。読者の関心を買おうとしたものとか、主題にかかわるタイトルであるために読んでみればじめて理解できるものとか、さまざまである。そういえば、村上春樹（ジャック・ロンドンに関心を持つ作家）の近作短篇集のタイトルも、『神の子どもたちはみな踊る』（新潮社、二〇〇〇年二月）であった。

ここに翻訳したロンドンの短篇も、一応「原始時代にかえる男」とはしてみたが、原題は「When the World Was Young」で、文字通りには「世界が若かったとき」という意味である。したがって、日本語のタイトルを打つことは、訳者泣かせの一つである。これまでいくつもの作品を訳してきたが、たとえば『The Road』（元の意味は「道」）は『アメリカ浮浪記』（新樹社）、『Before Adam』（元の意味は「アダム以前」）は『太古の呼び声』（平凡社）とし、原題をそのまま直訳するわけにはいかなかった。日本の読者にとっては、文字通りには不可解きわまりないからである。

さてこの短篇は、過去にも対訳の形などいくつか出版されている。内容が異様で興味深いので、早くから取りあげられたものと考えられる。最も早いもので、一九二二（大正十一年）、大阪毎日新聞社より『英米七人集』と題して、和気律次郎の訳で「世界が若かった時」と題して出ている。

また筆者の手もとには、「浜林生之助訳註」のもとに健文社から「獣人」と題して対訳の形で出ている。一九二四（大正十三年）年のことである。共に、すでに八十年ほど昔のものである。「はしがき」には見るべき中身がないので、ここには紹介しないが、八十年前を引き寄せてもらったために、その表紙（19 cm × 13 cm）と本文の書きだしの第一頁および第二頁のみを実物大で転載しておきたい。時代がひしひしと感ぜられよう。

さらには、すでに絶版になっているが、英語のテキストとしても出ている。一九五七（昭和三十三年）年初版、一九七五（昭和五〇年）年重版で、





WHEN THE WORLD WAS YOUNG

1. He was a very quiet, self-possessed sort of man, sitting a moment on top of the wall to sound the damp darkness for warnings of the dangers it might conceal. But the plummet of his hearing brought nothing to him save the moaning of wind through invisible trees and the rustling of leaves on swaying branches. A heavy fog drifted and drove before the wind, and though he could not see this fog, the wet of it blew upon his face, and the wall on which he sat was wet.

2. Without noise he had climbed to the top of the wall from the outside, and without noise he dropped to the ground on the inside. From his pocket he drew an electric night-stick, but he did not use it. Dark as the way was, he was not

1 sound 元来 soundline を用ゐて水深を測ることであるが、轉じて人の「氣を引いて見る」或はこの場合の如く「さぐる」類ふ」の義に用ゐる。

plummet 測量に用ゐる鉛で併には the lead さか the plumb さかいふ。さきに sound さいふ語を用ゐたのに因んで、the plummet of his hearing (彼の聴覺の測驗)と云つたもの。

獸 人

1 彼は落つき辨つた男だつた、彼はキューピ標の上に腰かけてしめつぱい暗の中に何か危險の警告でも聞えはせぬかときゝ耳を立てた。が耳をすましても聞えるものは見えない樹々の間を吹き渡る風のうめき聲と、ゆらゆらゆれる枝の葉すれの音ばかりである。濃い霧が風に送られて舞ふてゐる、この霧は目に見えないけれどもその濃氣は顔に吹きつけた、かけてゐる標もぬれてゐた。

2 彼は忍びやかに外側からこの壁の上へとのぼつたのであつたが、またこつそりと内側の地面へ飛び下りた。ポケットから懐中電燈を取り出したが使用はせなかつた。行く手は暗かつたけれども彼は燈火をのぞまなかつた。電燈を手にもち指をポケットにおてゝ彼は

ave=expect.

drove before the wind 風に吹かれて飛んだ。

2. he had climbed のぼるさきにも音は打てずにのぼつたのであつたが、と通つていふ故に I had Perfect を用ふ。

electric night-stick pocket-jump (懐中電燈)の類であらう。

Dark as the way was=through the way was dark.

NOTESを含めてわずかに五十ページの薄いテキスト（北星堂書店）である。この「まえがき」も、その大半をロンドンの生涯の紹介にあてており、見るべきものはないが、最終部分に数行だけこの作品自体に触れているので、当該部分のみ紹介しておこう。「……又彼が好んで描く人物は、文明と野蛮の妙な混じった人格をそなえて居り、此処に選んだ一篇も、彼のそういつた一面を示している。この主人公は時に原始的人間の性格を發揮し、非常に強い肉体力を持ち、獣を相手に喰うか喰われるかの烈しい闘争もやる。しかも面白い事は、主人公は二重人格者で、同じく二重人格を描いたかの Stevenson の *Dr. Jekyll and Mr. Hyde* とは違つて居る。これは薬を飲んで人物が変わるのであるが、London のものはそうではない。しかもこの二つの人格の間には数千年の開きがある。委細はテキストに就いて楽しんで頂き度い。」というものである。

最後に、この短篇は最初 *The Saturday Evening Post*, Vol. 183 (September 10, 1910), pp. 16-7, pp. 45-9. に掲載され、のちに短篇集 *The Night-Born* (New York: The Century Co., February, 1913) に収録された。